捨て猫

瑠依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨て猫

【コード】

N5627N

【作者名】

瑠依

【あらすじ】

学校の帰り道、公園に捨てられていた猫を見つけた青年達のお話。

(前書き)

涼 主人公

浩太 可愛い感じで元気な男の子

雅也 関西弁でお兄さんみたいな男の子

芯 しっかりとした真面目な男の子

それは、突然の出来事だった。先程まで、あんなにも晴れていた青空は、厚い雲に覆われ、辺り一面薄暗く、空気も淀んでいた。今では、地面を打つ激しい雨の音しか聞こえない。

でも、俺達には確かに聞こえたんだ。その小さく儂い声が・・・

「あ、猫だ。」

学校からの帰り道。全ては、浩太のこの一言から始まった。

「ん、何処や？浩太。」

「ほら、あそこあそこ！」

浩太が指を差した先には、古びた公園があっただが、急に降り出してきた雨の所為か、公園の中には誰一人として居なかった。

「ほんまや、捨て猫やな。」

公園の中にあるベンチの横に、ダンボールが置かれており、その中から、子猫が顔を覗かせていた。きつとまだ、生まれてから、そんなに月日が経っていないのである。その子猫は、とても小さかった。

ミヤア、ミヤア

とても小さくて儂い声をしていたが、俺達には、誰かに気づいてもらえるように、必死で鳴いているように聞こえた。

「やべ、あそこもろに雨掛かってんじゃん！」

そう言って、浩太は、その子猫の元に走り寄ろうとした。そんな浩太を見て、皆小さく息を呑む。

「待てよ、浩太。お前ん家、猫飼えんのか？」

「え、飼えないけど。」

芯の一言に、浩太はその足を止める。

ミヤア、ミヤア

また、子猫の声が聞こえた。子猫は、鳴き止む事を知らないかの様に、鳴き続ける。

「だったら近寄るなよ。面倒見れないんだろ。」

「う、そうだけど・・・」

芯の一言に、浩太は言葉が詰まり、顔が歪んだ。いつもの浩太であれば、可哀想だと、反論の一つでもする筈なのだが、何も言わずに口を閉ざした。否、言う事が出来なかったという表現の方が正しいのかもしれない。芯の目があまりにも真剣で、放った言葉の意味が、どんなに深い意味を持つのかを浩太は感じ取ったのだ。

雨は、子猫に追い打ちをかけるかの様に、どんとどんと激しくなっていく。子猫の辛さなど、まるで知らないで。

「・・・」

沈黙が流れ、辺り一面静寂が訪れる。激しい雨の音さえ、今の自分達には聞こえない気がした。

「・・・ま、芯の言う事も一理あるなあ。」

その静寂を破ったのは、今まで二人のやり取りを傍観していた雅也だった。

「でも、でもさあ！」

「浩太。」

「・・・」

また、静寂が訪れる。雨はどんどん酷くなり、薄暗い空が、この数分間で、更に酷くなった様に感じられた。

「・・・解った。」

浩太が苦しげに言葉を吐く。何所か怪我をしている訳ではないのに、その表情はとても痛く、辛そうであった。

「じゃあ、行くぞ。」

その場を去ろうとした時、皆何か違和感を感じて、足を止めた。ゆっくりと振り返る。

「あれ、涼？」

「涼？」

「おいこら、俺の話聞いてなかったのかよ？」

涼は一人、子猫の元へと向かっていった。此方からでは、どのような表情をしているのか、よく見えない。ただ俺達には、その背中がとても寂しそうに見えた。

「うん、芯の言ってる事は、正しいと思うよ。最後まで面倒見れないなら、立ち止まるべきじゃない。」

期待させてはいけない。希望を持たせてはいけない。束の間の喜びだけなら与えてはいけない。

「でも俺、思うんだ。人間ってさ、理屈ではそう思っても、こんな奴見かけたら、やっぱり放っておけないんだ。実際、芯と雅也だって、浩太が猫に近づこうとした時、自分も近づきそうになってただろ？」

涼の言葉に、芯と雅也は、ばつが悪そうな顔をする。涼は、子猫が入っているダンボールの前に、屈み込んだ。子猫は、雨に打たれて震えている。

「それでも、そこで立ち止まらない人っていうのは、本当の優しさを知ってる人なんだ。可哀想だからって優しくする事。でもそれは、自分が感じた罪悪感を癒す為だけの唯の自己満足。そうじゃなくて、本当の優しさを知っている人なんだ。」

希望を感じた後の絶望は、希望を得る前に感じていた絶望よりも落胆が大きい。本当の絶望を感じた事がない人は、容易く手を差し伸べてしまう。心の中に存在する、感情というものの本質を、少しも理解出来ていない、上辺だけの優しさしか知らないから。

「それが一番いいと、俺も頭の隅っこで思ってるよ。そうじゃないと、希望と与えると同時に、絶望も与えてしまう。中途半端な優しさは、己の自己満足でしかないから。」

きつと、本当の絶望を知っている人だけが、答えに辿り着くのである。立ち止まらないという優しさに。

「頭では、理解してるんだ。でも、でもな・・・」

涼は、ダンボールの中に手を差し込み、服が汚れる事も構わず子猫を抱き上げた。

「長い間、冷たい雨に打たれていた小さなこいつは、もうすぐで確実に死ぬだろう。」

雨の冷たさで震える子猫の身体。生まれてから、そんなに経っていない筈だから、免疫力も少ないだろう。そう、きつと長くはない。でも、もしかしたら、こいつが死んだすぐ後に、こいつを拾ってくれる人が、現れるかもしれない。ここで俺たちが、こいつの体を拭いてやったり、ダンボールを変えてやったり、雨の届かない場所に移動させてやったりしたら、こいつはきつと、少しでも長く生きられる。」

「涼。」

「こいつは、勘違いするかもしれない。やっと暖かい場所に行ける。もう、こんな寒い思いしなくて済むんだって。」

結局は、拾われなくても知らずに。

「その後、こいつは、悲しみに打ち碎かれるかもしれない。酷い絶望に、身を委ねるかもしれない。」

良い結末が待っているのかもしれない。悪い結末が待っているのかもしれない。

「でも、俺達のした事で、こいつの命が少しでも長くなるのなら。長く生き延びたその先で、誰かがこいつを拾ってくれるのなら。こいつは、本当の温もりを手に入れるんだ。」

そう、上辺だけの温もりなんかじゃない、本当の優しさ、温もり。例え、そのまま立ち去る事が、本当の優しさであったとしても、きつと俺達は後悔するだろう。自己満足でもいい。例え、上辺だけの優しさであったとしても、俺達人間にとっては、きつと必要なもので。もしかしたら、それで人間関係が成り立っているのかもしれない。今まで、その優しさに何度救われた事だろう。例え、その後苦しい事があったとしても、その優しさを踏み台にして、きつとまた立ち上げられる。

「何もしないで立ち去って、後悔はしたくない。その先に、ほんの少しでも希望があるのなら。」

それは、目に見えない小さな粒のようなものなのかもしれない。小さな、小さな希望。

「俺は、それに縋りたい。偽善の優しさだつて、きつと温かいよ。死んだら全てが終わりだ。生きていれば、きつと……」

子猫は、必死に、とても必死に生きようとしている。誰かに気づいてもらえるように、声を囁らして鳴いている。そう、泣いていたのだ。偽善者と、そう罵られてもいい。子猫だつて、こんな酷い雨の中、ずっと待っていたのだから、もう少しくらい頑張れる筈である。

「だから、俺は手を差し出すよ。俺は、こいつを助けたい。」

「……」

涼の言葉が、三人の心の中に沁みていく。きつと人間は、理屈では動けない生き物なのだろう。本当は助けたい。小さな小さなこいつを。

「奇麗事だな。世の中、そんなに甘くないぜ？」

芯の放った言葉に、涼の顔が悲しそうに歪む。きつと涼も、そのような事は分かっているのだろう。

「でもまあ、しょうがねえのかもしれないなあ。もしかしたら、救えるかもしれない命を救う事を、そんな難しく考えてもな。」

涼は、伏せていた顔を勢いよく上げた。芯に笑みが零れる。

「俺、ダンボール探してくる！」

浩太も、先程までの悲しそうな表情とは裏腹に、今ではとても嬉しそうだ。皆、本当は助けたかったのだ。

「涼は優しいなあ。」

雅也は涼の隣に立ち、優しい笑みを浮かべてそう言った。

「優しくなんかないよ。俺はただ臆病なだけ。嫌われたくないから、擦り寄って来る奴に、冷たくなんか出来ないんだ。」

誰かに嫌われる事は、本当に辛い事である。ましてや、それが仲

間や自分の大切な人なら尚更に。

「嫌われたくないから、臆病なだけなんだよ。そう、俺は唯の臆病者。優しくもなければ強くもない。」

そんな涼の周りに、三人が集まる。

「いや、涼は優しいよ。」

「そうそう。」

「ふっ。」

皆の気持ち、涼の胸に沁みる。涼にとって、それはとても温かく感じられた。

そのような中、涼の腕の中から、突然子猫が顔を出した。

「ミャア。」

そんな子猫を見て、四人が顔を見合わせ、同時に笑い出す。

「ありがとう。」

辺り一面、温かい空気に包まれた。あれ程、酷く降り続いていた雨は、今では穏やかになってきている。皆の心を映し出すかのように。

遠くの方で、空に浮かぶ雲の切れ間から、光が射し込むのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5627n/>

捨て猫

2010年10月8日14時26分発行